

中谷省古－見世物・医学・美術を横断した近代大阪の奇才－

内藤 直子

要旨 中谷省古は大阪の人形師であるが、その人物像や活動の詳細は知られていなかった。本稿は、特別展準備過程での調査成果をもとに、生人形興行、医学、美術といった諸点から資料を引用し、これらを付き合わせることで彼の幅広い活動の実態に迫ることを目指した。特に中谷省古をめぐる医学と美術、そして生人形興行との接点については、同時代の美術や社会の潮流に照らし合わせ、考察する。そのうえで、現存が確認できる唯一の作品「奥田ふみ像」や残された資料類から、省古の人物表現は、〈外見を似せる〉ことだけにとどまらず〈内面をリアルに表現する〉ことをも追求していたのではないかという見解を呈示する。

はじめに

筆者は特別展「近代大阪職人（アルチザン）図鑑—ものづくりのものがたり—」（平成28年4月29日～6月20日）を企画開催するにあたり、いくつかの柱となるテーマを設けた。そのひとつが、江戸時代に最先端の医学の舞台であった大阪の地の医学が牽引した、あるいは医学が影響を与えたものづくりのあり方を明らかにすることである。これは工芸品が元来、用という使命を極める中で研ぎ澄まされた機能美を伴うものである、という立場に立ち、その用のひとつとして医学というテーマを設定し、情報や作品を集積するものであった。また同様に、用という使命を極めることで結果的に優れた造形となった対象物として、千日前を中心として発展した大阪の生人形興行に基づく彫刻の展開についても注目した。

それらの調査過程では医学者と工芸家との直接交流を示す情報を初めて明らかにすることもでき、その主要な一部の調査成果は展覧会場および展覧会公式図録で紹介している。しかし図録はあくまで全体像をわかりやすく伝えることを旨として制作したため、紹介し切れていない情報も多い。

特に、本展で初めてその作品が紹介されることとなった中谷省古については、その経歴含め、図録の誌面では十分な紹介ができなかったこと、また、医学と興行という異質なテーマの双方に関わる、希有な存在であることから、本稿にて改めて詳述する^①。

中谷省古という人物

中谷省古（1837～1912）は広島出身で大阪へ出、幅広くものづくりに携わった作り手である^②。作り手と書いたのは、省古が必ずしも美術的価値の有無に制作方針を置いていなかったことを承けてのことである。そんな省古は本人そのものよりも彫刻家・中谷翫古・高古の父として、また平橋田中や

滝澤友治の師として、むしろ知られている。

彼のものづくりのジャンルの幅広さはその略伝といえる「明治木彫の畸人 中谷省古」^③に詳しい。この著述は筆者不明であるが、中谷省古の事跡が年代とともに具体的かつ克明に活写されており、近親者による情報が基になっていると思量される。本誌が美術雑誌であることから察するに、甌古ら、省古にきわめて近い関係者が関わった記述と思われる。細かな年代や詳細な事実関係に誤認を含む可能性はあるが、他の文献等と付き合わせた時に合致する情報も多い。描写や年代が細かく記されているため、細部について留意する必要はあるものの、おおむね彼の略伝として引用するには適当であると考えられる。本文で以下「略伝」と記すのはこの著述を指す。

この略伝によると省古は面打師に就いて彫刻を学び、広島藩に細工人として抱えられたのち、藩命により藩札用の銅版の彫刻や洋装用の紋付ボタンの制作といった諸細工を請け負っていた。明治維新後は、祭礼の山車人形を制作していたところを来阪^④し、大阪との縁を結ぶことになる。

その後故あって早々に造幣局を辞した省古は千日前の興行用の生人形、紙製の灯籠や石膏の標本、蠟細工、蒔絵の改良、そして陶製の置物（後掲資料^⑩参照）にいたるまで素材を問わない作品作りを行った。そんな彼の姿は、現代的な「工芸家」という枠組みでは捉えきれないスケール感であり、器用な細工人とでも呼ぶべき素顔が見て取れる。幅の広さだけでは無い。その制作活動のレベルがいざいざも水準以上であったことは、その制作に関わる記述が、見世物興行関係から美術関係に至るまで幅広いジャンルで散見されることからみてとれる。たとえば、600枚の鼈甲を魚の鱗として用いた生人形（後掲資料^②参照）といったからくりを備えた素材不問の新機軸を創出するところなどには、人並み外れた独創性が認められる。その主な事跡をまとめた年譜を稿末に掲げるので参照されたい。

このような多岐に亘る省古の仕事は2つに大別される。1つ目は、明治8年から30年代にかけて携わった生人形・からくり細工・蠟細工制作。そして2つ目は、明治10年代から20年代にかけての数々の美術展への出品活動である。前者は主に大阪での活動、後者は地域を限らず東京を中心に大阪も含めた活動である。

大阪・千日前の生人形興行に見られる、芸術性よりも生き写しであることを指向する前者の作風は前近代的であると言わざるを得ない^⑤が、その一方で、この時期東京で発足した新たな制作者集団－日本美術協会や東京彫工会といった－と最も盛んに交流していた大阪の工芸家然とした後者の姿は、現代的な目で見れば相反する姿とも受け取れるものである。しかし当時ことさらその両面を省古が区分して認識した形跡は見受けられないし、彼の中では自然なこととしてその双方を受け入れていたようである。

ともあれ省古は、大阪において生人形制作でその名をとどろかせるようになっていった。そんな彼の技術は思いがけないところに活かされていく。医学における人体模型制作である。

明治前期の医学と美術の様相

明治維新时期における解剖や模型制作について重要な役割を果たしたのが今田東^{つかぬ}（1850～1889）である。今田については、平成20年から21年にかけて山口県医師会報に5回に分けて連載された吉岡達生

「今田東先生の生涯と業績—明治前期の解剖学者—」に詳述されている。

同論によると、明治維新期に日本の解剖学を牽引した今田は、幕末の動乱期に岩国藩士としてたびたび従軍するなど、元来医学とは無縁の生活を送っていたが、明治5年に東京の第一大学区医学校（現在の東京大学医学部）に小使いとして就職して以後、田口和美のもとで解剖学を現場で学び、かすかすの解剖模型の制作に携わったという。また、彼の活動は医学の世界にとどまらず、美術工芸においてもこの時代を物語る動向を残している。

牙彫師の旭玉山（1843－1923）は、象牙製の克明な髑髏や人体骨格を残したことで知られるが、この玉山は明治初年、医師の松本良順（1832－1907）と親交を持ち、1ヶ月間実物の頭蓋骨のレクチャーを受けて象牙の髑髏を制作、松本はそれを時計の紐に付けたと伝えるほか、のちに大学東校の田口和美のもとで人体骨格を学ぶなど、医学と密接に関わっていた様子がうかがえる牙彫師のひとりである^⑥。その成果は第1回（明治10年）、第2回（明治14年）の内国勸業博覧会への髑髏の時計飾りや置物類の出品記録や残された作品からもわかる。そんな玉山が髑髏作品を出品した第2回内国勸業博覧会で審査官をつとめた1人が、今田東であった。当時東京大学で准教授に当たる助教の任にあった時期であり、彼に与えられた審査対象は「解剖学的ノ物品」であった^⑦。今田は明治20年の東京府工芸品共進会でも審査官をつとめた^⑧。同会で今田は、医術用の用具に関する審査の主任、即ち審査のリーダーであったほかに、金属や木、竹、象牙や角といった素材を用いた工芸作品の審査においては参与という、いわば次席の役割を担った^⑨。ちなみにこのとき、加納夏雄や香川勝廣、旭玉山や石川光明はその下位で実務担当とでもいうべき「審査員」に任ぜられている^⑩。このように、医学者が名だたる工芸家と名を連ね、工芸作品の審査官をつとめる様子からは、当時における医学と工芸との距離感の近さが見えてくる。今田は「工芸品共進会講話会」で「人体各部ノ割合 彫刻者ニ向テ談ス」を講演したことから分かるように、工芸（彫刻）作品において、その人体表現を評価することを期待されていた。当時、旭玉山の骸骨は海外でも評判だった^{⑪⑫}。そんな好機を産業振興を旨とした共進会は見逃すことなく、工芸制作に人体表現を取り入れることで海外を視野に入れた販路拡大の可能性を見込み、推進したのではないだろうか。

今田は明治21年頃から東京彫工会で美術解剖学を指導するが、その緒についたばかりの明治22年11月22日、40才の若さで世を去る。その葬儀式典において、大学学長の三宅秀、教授の田口和美の次に弔辞を述べたのが東京彫工会の渡邊洪基会頭である。弔辞では、今田が東京彫工会のために毎月講義を行い、そこで体の構造、面貌の組織から筋肉や皮膚の緊張や弛緩のさまを図解により説明してくれたこと、その甲斐あって、明治22年の第4回競技会では人体表現力が向上したことが述べられ、「君を亡ふは猶一元首を喪ふが如し」と最大級の賛辞が贈られた。解剖学者に対する当時の工芸界の期待の大きさがわかる。

そんな今田と同じく東京で活躍したのが田口和美（1839～1904）である。彼もまた解剖学者であり、明治前期を中心とした解剖学と人体模型制作、それに伴う制作者との関係を考える上でのキーマンである。

田口の動向のうち、人体表現という美術工芸面で注目すべき1点目は、明治5年3月に松本喜三郎

に紙塑の人耳¹³を、また、川本洲楽に象牙製の骨格の鉸鏈を制作させ、これを明治6年のウイーン万博に奉じたと伝わる1件である。松本喜三郎は言うまでもなく生人形の泰斗であり、川本洲楽は根付師・人形師として知られる三代原舟月の弟子の牙彫師である¹⁴。

そしてもう1点は、今田東の没後、東京彫工会にて「美術応用人体解剖学」の講義を行ったことである。その講義内容の一節が明治24年の「東京彫工会報告」第2号に載っている。明治20年と注記されているが、その時期田口は留学中であることや記載の内容から察するに明治23年ごろの講義かと思量される。この講義中、大学教授という多忙の身ながら連続講義を引き受けた理由として、田口は2点を挙げる。1点目は、東京彫工会の作り手たちの研究への熱意である。ことに、自分の作風に我を張らず、自分の持つ技術に加え、学問をも取り入れようという柔軟さと向上心に応えようと考えたとみられる。そして2点目は、明治20年、田口自身が自費でヨーロッパに留学したときに訪れた博物館での経験である。同地で田口は、日本の工芸作品が、自在置物のような生き写しの動物表現には長じていても、人物表現はそのレベルに達していないことを指摘され、また実感した¹⁵。そして田口はその原因を、西欧にあって日本に無い「美術応用身体解剖学」の存在にあると考えたのである。

また田口は留学の際に、多湖実敏・大熊氏広の両氏と交遊を持っている。多湖は印刷技術の向上に資した技術家、そして大熊はラゲーザに学んだ彫刻家で、いち早く人体表現への医学的知見の反映を意識していた¹⁶。田口と同時期にヨーロッパに滞在していた彼らとの交流は、美術制作に解剖学が資する役割をよりいっそう田口に意識させたことだろう。田口は医学という留学本来の目的以外の時間を積極的に同地の「美術応用人体解剖」に関する調査に費やしていった。

ここで田口は「美術家」と「美術者」という2つの言葉を使い分け、前者については西欧風の、いわゆる純粋美術の追求者のことを指し、日本の古典的な作り手を後者の呼び方で指している。しかし田口はその両者に優劣の別を求めている。それは、日本の「造り物は実に妙を得て居る」という田口の言からも分かるように、技術を駆使した日本の細密・緻密な工芸品が、ヨーロッパの美術作品と並んでも決して見劣ることの無い優れた作品であると確信していたからにはほかならない。

日本の古典的制作技術の技術力に加え、人体を内臓レベルから知り、また感情という心理面をも加味することで、ヨーロッパの彫像のように人体をより生き生きと克明に表現することができると田口は考えていた。そのための裏付けとなる学問を学ぶ機会を設け、それを彼らの持つ優れた技術力と調和させることを願い、この講義を積極的に引き受けたのである。

そんな田口和美が解剖学と美術制作の融合を模索していた頃、同じ大学の解剖学研究室を経て、明治19年に府立大阪医学校へ着任したのが石川喜直（1859～1916）であった。

中谷省古と石川喜直—工芸家と医学者を結んだもの

石川喜直は安政6年（1859）、東京に生まれる。慶應義塾にて医学を修めたのち今田東ら幾人かの元での修行を経て、明治17年から2年間、大学（現在の東京大学医学部）の解剖学教室に勤務したのち明治19年、大阪医学校（現在の大阪大学医学部）へ転任した。大阪では西区江戸堀下通に居を構え、明治34年に金沢医学専門学校（現在の金沢大学医学部）に転任するまでの15年間を大阪で過ごした。

金沢医科大学に石川自身が提出した履歴書には大阪医学校時代の様子がこのように記されている¹⁷⁾。

府立大阪医学校に就職以来、公務の余暇を以て故島雪舸に就き彫像術を、
中谷省^{ママ}吾に就き石膏模型術及蠟粘土模型術を、独逸人エルンスト、
クルーグに就き独逸語学を修業。

(旧字旧仮名遣いは改め、読みやすいよう句読点を付した)

中谷省古は、後掲する資料に散見されるように同時代資料では「中谷省吾」の表記も見受けられる。これが単なる誤用なのか、本人が両用を認めていたのかは不明であるが、中谷省古本人を指していることには違いない。

この記録によると、解剖医の石川は大阪在任中、越前にルーツを持つ彫刻家・島雪舸（1863～1893）に人物彫刻を、そして中谷省古には石膏や蠟を用いた模型制作術を学んだという。確かに島雪舸には木彫の作品が現存し、中谷省古はその略伝に石膏や蠟細工をたしなんだことが記されている¹⁸⁾。省古の略伝にはこうある。

彼は明治十八年頃から蠟細工を初めて、果実魚類などを写し、苦心経営、その用途に確信を獲たので、三十二年に至り、医大教授解剖学博士石川義直^{ママ}の指導の下に、人体局所解剖を蠟細工で作し、凡そ一年有半寝食を忘れて、漸く完成したので三十三年十二月、これを千日前で観世物に出した。それは殆んど裸体で、婦人に関するものでは双児妊娠、逆か児、臍帯顛落などあり、また梅毒、肺病、チブス諸症の局部解剖もあり、世人をして生理思想を養わしむるに足るものであった

(中略)

この観世物は従来小屋掛けのものとは趣を異にし、板囲いして、表口はペンキを塗り、欧風建築を模し、アナトミ館と命名し、木札を廃して切符制度を行い、大阪市中の名士に招待券を発するなど、其の頃では断然新傾向の企画であった。

(旧字旧仮名遣いは改め、読みやすいよう句読点を付した)

これによると、省古が石川教授に就いて本格的に人体解剖模型を制作し始めたのは明治32年からの1年半程度であったようだ。ただ、それ以前の明治18年から蠟細工によるテストピースの制作を重ねており、もう少し前から石川教授と知己であったようだ。

また、完成品の披露については、明治33年の12月に千日前アナトミ館にて蠟細工による人体局所解剖の見世物興行を行ったことが記されている。実際、明治34年1月20日の大阪経済新聞には、奥田弁治郎を館主とするアナトミ館にて、石川喜直氏口授・中谷省古作の「精巧人体解剖蠟型」が木戸五銭という比較的高額の料金を取って興行された記録があり、その様子を描いた図には「分娩期胎児模型」「双児」という題簽が付された人体の図が描かれ、略伝の記述内容を裏付ける¹⁹⁾。この興行に際し、

医学校教諭・石川喜直の名は、その再現性の生々しさをよりリアルなイメージとして誇示するために多用されていたようである^⑩が、石川がそのことをどう受けとめていたのかを知るすべはない。言うまでもなく、先述の田口らの活動と、石川・中谷の活動とは目的が異なる。しかし、腕の良い工芸家が人体に忠実に模型を作る、という一点において、その行為自体は共通するし、ひとつの時代相として捉えるべき現象である。ただ、残念ながら当時中谷が制作した人形（生人形）で確認できるものはない。この頃、省古はすでに60才を過ぎ、興行用の人形制作も美術展への出品も子や弟子へと世代交代の様相を呈していた。（後掲年表参照）一体どんな作品だったか。その手がかりとなりうるのが晩年作「奥田ふみ像」である。

大阪歴史博物館蔵「奥田ふみ像」について ―その〈内面〉のリアルな描写

大阪の繁華街として知られる千日前（大阪市中央区）は、明治維新後に興行地として開発された。その開発に尽力したのが奥田弁次郎（初代・1837～1898）・奥田ふみ（1839～1929）夫妻である。弁次郎は興行のプロモーターとして活躍を続け、中谷省古ともしばしばともに興行をともにしている。



写真1
奥田弁次郎像 大阪歴史博物館蔵
（奥田幸治郎氏寄贈）

一方のふみは、興行のチラシにこそその名を見せないものの、弁次郎を支えていたしっかり者の一面が語り継がれている。

そんな奥田弁次郎夫妻の像と奥田家が手がけた興行関係資料は平成21年、ご子孫の奥田幸治郎氏により大阪歴史博物館に寄贈された。このうち、奥田弁次郎像（写真1）は明治21年に博多時代の山崎春吉（のちの山崎朝雲）が制作し、奥田ふみ像（写真2）は弁次郎像制作後13年を経た明治34年春、浜寺の旅館にて中谷省古が制作した。

ふみ像は、弁次郎像と比べるまでもなく一見して細部の彫り口は粗い。緻密さや細部の技巧といった点を重視していなかった省古の姿勢がうかがえる。しかしながら全体を見たとき、柔らかい表情の中に鋭いまなざしを見せる風貌描写からは、その、優しくも厳しかったであろう人間性が生々しく伝わってくる。それは、粗い彫り口の中にも、目のくぼみ具合、涙袋、ややたるみのある頬からあごにかけての肉付きや、わずかに肩が前に落ちた老婆特有の座り姿勢を見逃すことなく表現しているからに他ならない。荒っぽい彫りと肉取りの細やかさという相反する要素が同居した不思議な作ともいえる。



写真2
奥田ふみ像 大阪歴史博物館蔵
（奥田幸治郎氏寄贈）

現存が確認できる省古の作品は、現在この1点しかないが、彼が制作した人物表現に対する批評を見ると、「容姿、態度等は氏が最も丹精を凝したる者なれば殆ど真に迫り」（後掲資料⑤）、「何れも人形とは思はれぬ程の出来なり」（後掲資料⑥）、「態貌甚だ野鄙ならず」（後掲資料⑦）、「妊（註：於福のこと）懐笑を含む 刀法頗る巧なり」（後掲資料⑪）とあり、単に外見の姿形を模すのではな

く「態度」、つまりその内なる人間味を伝えている点、あるいは作品全体が放つ迫真性が数多く指摘されている。もちろんこれらの批評の中には、刀法、つまり彫技をたたえる評価もある。おそらく壮年期の作品は、細部の彫りも、奥田ふみ像ほど粗くは無かったのだろう。しかし、彼の作品の最大の見どころは人間くささの表現であった。それは、人を人として認識させる必要に即して作り上げた生人形や、人体を正確に再現するための人体模型を手がけた省古ならではの、人間のリアルな内面描写であった。

奥田ふみ像は、晩年作ゆえに彫り口が粗かったのであろう。しかしみじくも細部の彫りが粗かったがゆえにこの作品は、省古作品の本質たる、内面の人間くささを強く印象づける作品だと位置づけられよう。ともすれば外見の酷似性だけが称賛されがちな生人形だが、少なくとも中谷省古の作る人物が皮相の模倣にとどまるものではなかったことを「奥田ふみ像」は物語っているのだ。

むすび

本稿を記すにあたり、中谷省古の仕事の幅が広すぎ、どこから着手しようか迷いながらもひとまず現時点での知見を記した。今後加筆修正されるべき点が多いことは承知であるが、そのためのたたき台を呈示させていただいたということで、至らぬ点はお許し願いたい。

本稿を終え、改めて、中谷省古とはひとくくりでは語り尽くせないスケールの大きな人物であると実感している。今後、多方面から彼の研究が進むことを願うばかりである。

なお末筆になるが、本稿および特別展「近代大阪職人図鑑－ものづくりのものがたり」図録を執筆するにあたり、とりわけ、ウェブサイト「見世物興行年表」と「近代日本アート・カタログ・コレクション」シリーズからは大変多くの資料を参照させていただいた。見世物および近代美術に関連する基礎資料を網羅したこれらの労作に対し心からの敬意を表するとともに、現存唯一の中谷省古作品である「奥田ふみ像」をご寄贈いただいた奥田幸治郎氏はじめ、調査にご協力いただいた関係各位に改めて感謝申し上げる次第である。

[資料編]

資料① からくりの生人形

実に細工は古今未曾有にして、遙かに松本氏、安本氏の上に出るが如し。此細工人は芸州広島産中谷豊吉なる者のよしにて、自ら五臓機関（からくり）と号し、従来の生人形と違がひ種々の活動をなして、然も陰に人有て是を活動せしむるにあらず。観者の足の響き機関に通じ、自然と運転をなす事を発明せしなり。木偶、悉皆奇ならざる無く、妙ならざる無し。中ン就く四条碩にて九条家の家士島田氏暗殺の体は尤も奇なり。口上云ひと唱る者が切首を提て観者に見せしむるば、首級は眼口を開き、口中より鮮血迸り落る。又、春日花下に宴する様は所謂三人上戸ありて、彼の自然運動にて、笑ふは口は大きく開き額或は睫を鼓して、怒るは頬を膨らし額に筋脈を顕はし、泣くは眉を寄せ眼より涙を流す。其巧なる、実に類少し。又、舌切雀の老婆は妖怪に袖を曳れ、額、胸より汗を流しぬ。居風呂に入る様は真の湯を泌らせ其中に木偶を入れ、額を皴めて湯の蒸気中に熱きを耐ゆる杯も、都て真の如し。其余、秋の野には諸虫のすだく声、犬の吠る声、鳥の啼く声、又驚ろくに堪へたり。

細工をなすを見し人の咄に、活動をなす木偶は、解体の図を見て機関を真の如くし、表皮は鹿のもみ皮を以て張るよし。又婦人の木偶は肉食に彩り置き、毎朝眉刷毛にて白粉を付けしめ、唇に燕脂をさし、翌朝木綿裂に湯して拭ひ、又昨日の如く化粧すとぞ。

「東京日日新聞 明治8年4月9日」²¹

資料②-1 大珊瑚興行への「鼈甲製生人形」提供

十五年一月、大阪に小栗某とて珊瑚の大問屋²²があった。偶々土佐沖から六尺三寸の大珊瑚を取獲したので一番番頭の鈴木彌兵衛と云ふ人が、これを世間に紹介して一儲けせんと省古に力を借りて来た。そこで彼は東京に出て、浅草矢場の江崎禮二、蕎麦屋萬盛庵の主人、傳法院の坊さんなどを講演にして、浅草公園で之を見世物に出した。併し、ただ大珊瑚だけでは興行にならないと云ふので、六百枚の鼈甲の一つひとつを鯉の鱗に代用して、五間あまりの素晴らしい大鯉を作り、それに書写山の鬼若丸を添へて見せた。

「明治木彫の畸人 中谷省古」²³

資料②-2

浅草奥山珊瑚見世物の太夫元弥光玉は、今度鼈甲細工の生人形を取交ぜ、近々興行すると云ふ

「いろは新聞 明治16年3月11日」²⁴

資料③ 日本美術協会の美術展覧会への出品

大阪府 中谷豊吉

木彫設色漁夫獵夫像

仝羅漢

「明治廿一年美術展覧会出品目録 新製品 第五号」²⁵

資料④ 日本美術協会の美術展覧会への出品

大阪府 中谷豊吉

本会課題水石契久

木彫粉彩養老樵夫 置物 一個

「明治廿二年美術展覧会出品目録 新製品 第五号」²⁶

資料⑤ 大阪博物場での生人形陳列

有名の人形師なる府下東区安堂寺町二丁目の中谷省^{マツ}氏は、来る三十日より大阪博物場内に於ける工芸参考室に、曾我兄弟復讐の生人形と大磯の虎の生人形とを陳列する筈の由なるが、其生人形は時代の風俗を古書に考徹して衣服装飾等を調整したるのみならず、容姿、態度等は氏が最も丹精を凝したる者なれば殆ど真に迫り、所謂人巧を以て天致を奪ふ可き美術の好趣、一見の下、人をして喫驚せしむるばかりなりと云へり。

「東雲新聞 明治23年3月8日」²⁷

資料⑥ 省古・翫古合作の生人形

興行師奥田弁次郎の発意にて今宮村眺望閣構内旧萬国名所跡に設置し、来月一日より開場する帝国美術大江山実景と云る生人形の観物は彫刻に名ある南区安堂寺町一丁目中谷省古同子息翫古両氏の製作にして、大江山の内廿四箇所に入形を飾り、何れも人形とは思はれぬ程の出来なりと云ふ

「大阪朝日新聞 明治24年12月27日」²⁸

資料⑦ 第6回彫刻競技会への出品

褒状一等 木彫彩色浦嶋子像 大阪府 中谷省古

態貌甚ダ野鄙ナラズ螺殻尤其真ヲ得タリ

「東京彫工会報告第三号」明治24年11月30日²⁹

資料⑧ 日本美術協会の美術展覧会に出品

全府 中谷翫古

木彫粉彩悪鬼退治不動像 一軀

木彫粉彩大磯虎女像 全

大阪府 中谷省古

木彫着色観音像 一軀

木彫農夫牽牛置物 一個

「明治廿四年美術展覧会出品目録 第四」³⁰

資料⑨-1 日本美術協会の美術展覧会に布袋の置物を出品

大阪府 中谷翫古
木彫紫式部図置物 一個
全 中谷省古
木彫布袋観月図置物 一個

「明治廿五年美術展覧会出品目録 第三号」^⑳

資料⑨-2

二十五年、美術協会に「布袋」を出し、宮内省御用品となった。

「明治木彫の畸人 中谷省古」^㉑

資料⑨-3

当地の中谷省古と云ふ彫刻師は、先年、東京美術共進会へ布製の置物を彫刻して出品したるに、同品は宮内省へ御買上となりし程なるが、今度、同人が意匠を凝せし大人形の彫刻品を来る一月一日より今宮村眺望閣の辺りで観物とする由にて、此興行人は例の奥田弁治郎なりと云ふ。

「大阪毎日新聞 明治26年12月25日」^㉒

資料⑩ 東京彫工会常会へ出品された「陶製羅漢」

物名	作名	出品者
陶製羅漢像	中谷省古作	前田健次郎

「東京彫工会報告第四号」^㉓

資料⑪ 第7回彫刻競技会に出品

木彫於福置物 大阪府 出品者 中谷省古
妊懐笑ヲ含ム刀法頗ル巧ナリ

木彫班女前置物 大阪府 出品者 中谷翫古
憔悴散髪堤畔児を尋ヌルの想アリ

「東京彫工会報告第六号」^㉔

資料⑫ 日本美術協会 春期美術展覧会に出品

大阪府 中谷翫古
木彫新羅三郎像 自作 一個
中谷省古
木彫菅公幼稚 滝澤友次作 一個

「明治廿七年 春季美術展覧会出品目録 下」^⑤

資料⑬ ライト館生人形（年次不詳）

千日前の東側で立並んだ最初の席が奥田席である。（註この席の位置は現在電車道路になってゐる）奥田席は十年前二十四年頃から引続いて荒山鹿之助の西洋運動を興行した定席であったが目下この一座は清国へ出稼ぎ中なので、留守番代りにライト館といふのを設けた。これは人形師の泰斗中谷省吾^{ママ}が西洋にあった光線反射の活人形を人にも聞かず書物にもよらず、自分其術を工夫して発明したといふ走り物、専ら河海に於ける水中の人の働きを巧に写し出し妖怪の襖の間に霧の如く幻の如く出没するさまを示したもので、何しろ千日前では封切りの初物とて人気を呼んでゐる。

「三十年前の千日前」^⑦

資料⑭ 翫古または高古作の人形（年次不詳）

第三井筒席では中谷省吾^{ママ}の息子が拵へた餓鬼の人形を見せてゐるが、如何にも精巧で技術の熟練には驚いたが、気の弱いものはとても見てゐる事が出来ないだろう。

「三十年前の千日前」^⑧

中谷省古年譜

和暦	西暦	省古年齢	省古事跡(全体・生人形関係)	省古事跡(美術団体・美術展関係)	家族・弟子・関係者	典拠
天保8年	1837		中谷省古(本名豊吉)生まれる			[中]
明治元年	1868	31			長男・省古生まれる	[作]
明治3年	1870	33	大阪へ出て造幣局に出仕			[中]
明治4年頃	1871	34	造幣局を退職、広島に戻る			[中]
明治6～7年頃	1873～4	36～37	再び大阪へ出る			[中][作]
明治8年	1875	38	千日前で生人形興行(1月)			[明][見][日]
明治10年	1877	40	千日前(1月)および名古屋(9月)で曾我物語の生人形興行 大阪医学校の医師とともに人体解剖を実施			[見][中]
明治13年	1880	43	千日前で「里見八犬伝」の生人形興行(1月)			[見]
明治14年	1881	44		第2回内国勸業博覧会に木彫彩色の「鍾馗」「鍾馗関羽」「出山釈迦」「魚籃観音」を出品		[内]
明治15年	1882	45	浅草公園で行った大珊瑚興行に鑿甲製の大鯉と鬼若丸を出品			[中]
明治17年	1884	47			省古、鈴木雷斎に洋画を、省古に彫刻をまなぶ。	[作]
明治18年	1885	48	このころから蠟細工に取り組む			[中]
明治19年	1886	49	このころから石川喜直に石膏模型術及び蠟粘土模型術を教授する。		石川喜直、大阪医学校に奉職	[石][中]
明治20年	1887	50	明治天皇の大阪巡幸に際し、大阪市南区役所の仲介により、「紙製灯籠」(厳島神社銅灯籠写し)を天覧に供した			[中]
明治21年	1888	51		日本美術協会展に木彫彩色の「漁夫狛犬像」「羅漢像」を出品		[日]
明治22年	1889	52		日本美術協会展に木彫粉彩「養老樵夫置物」を出品 森川杏園・田中主水ら十数人とともに大阪あべの・源正寺にて「彫像会」を結成		[日][中][上方]99号(昭和14年)
明治23年	1890	53	名古屋で「大井遼太郎他朝鮮事件顛末の生人形」の興行	第3回内国勸業博覧会に木彫「仁王首彫像」など8作品を出品するも一部は落選。 大阪博物館内工芸参考室に「曾我兄弟復讐の生人形」と「大磯の虎の生人形」を陳列(※資料2)	省古、第3回内国勸業博覧会に奈良三月堂の不動明王模刻を出品	[明][作][中][内]
明治24年	1891	54		日本美術協会展に木彫着色「観音像」と、木彫「農夫牽牛置物」を出品 東京彫工会第6回競技会に木彫彩色「浦嶋子像」を出品、褒状一等となる 中之島洗心館での日本美術協会大阪支会発会に参与。木石彫刻部門の技芸員となる 東京彫工会常会に中谷省古作「陶製羅漢像」が出品される	省古、日本美術協会展に「木彫粉彩悪鬼退治不動像」「木彫粉彩大磯虎女像」の2躯を出品、後者は褒状一等を受ける	[日][東][中][作]
明治25年	1892	55	南地眺望閣で省古・省古合作による「大江山実景」の生人形を展示(1月)	日本美術協会展に木彫「布袋観月置物」を出品。宮内省御用品となる。 東京彫工会第7回競技会に木彫「於福置物」を出品 倶楽園商業倶楽部で美術奨励会を発起。大阪の美術振興につとめたが失敗に終わる 来山堂に安置する小西来山像を制作。(時絵師安原清時は時絵顔額を奉納)。来山ゆかりの陶製人形を模した素焼の人形も制作し、来会者に配布した	省古、日本美術協会展に木彫「紫式部」を出品、褒状二等。 省古、東京彫工会第7回競技会に木彫「班女前置物」を出品、褒状一等。	[引]札、大江山実景(大阪城天守閣蔵)、[見]、[中]、[日]、[作]、[東]
明治26年	1893	56		日本美術協会大阪支会第一回展を泉布館で開催。省古は彫刻部の審査員を務める シカゴ万国博覧会に出品する「御殿女中」を製作	平櫛田中、省古に弟子入り(翌年体調不良により帰省) 省古、東京の竹内久一に入門 省古、シカゴ万国博覧会に出品 省古、東京彫工会第8回競技会に木彫「遠城築置物」を出品。	[中][平][作]
明治27年	1894	57	南地眺望閣で「大人形」の興行	日本美術協会展に滝澤友次作木彫「菅公幼稚」を出品。	省古、日本美術協会の会員となり、日本美術協会展に木彫「新羅三郎」を出品	[見][日]
明治28年	1895	58		このころから奈良で時絵の改良を試みる。(約2年間)	平櫛田中、省古宅に戻る	[中][平]
明治29年	1896	59			次男の球次郎(高古か)、高村光雲に師事	[平][郷土]
明治30年	1897	60			平櫛田中、球次郎と東京で同居 省古、東京彫工会通常会員となる	[平][作]
明治31年	1898	61			省古、東京彫工会競技会に木彫「鹿猿置物」を出品、褒状一等を受ける。また、木彫「舞楽納骨利」を日本美術協会展に出品。	[日][作]
明治32年	1899	62	大阪府立医学校助教諭・石川喜直とともに蠟細工の人体解剖模型を制作		省古、東京彫工会競技会に「少女遊戯」を出品し一等褒状を受ける。また、日本美術協会展に木彫「子供置物」を出品し褒状二等を受けて宮内省買上げとなる。	[日][東][中][作]北陸に於ける
明治33年	1900	63	千日前アナトミ館で人体解剖蠟細工興行(12月)		省古、東京彫工会競技会に出品 省古、京都彫技会委員となる 中谷球次郎・平櫛田中、東京彫工会に新規入会	[中][見][作][東]
明治34年	1901	64	千日前第一井筒席で海産物・外国人種等の模型蠟細工の興行(省古・球次郎との合作) 奥田ふみ像(大阪歴史博物館蔵)制作 餓鬼の人形興行(省古または球次郎)		石川喜直、金沢医学専門学校へ転任(2月)	[中][見]
このころ			千日前ライト館にて生人形興行			[上方](昭和6年)
明治36年	1903	66	広島へ行き、刀剣研磨も手がける(～3年) 数年、大阪に戻る			[中]
明治41年	1908	71	広島・宮島の対岸に1年あまり滞在。			[中]
明治43年	1910	73	安藝艦の進水記念の贈呈品・木彫「宮島全景」(2000分の1)を制作。			[中]
明治44年	1911	74	宮島・大願寺境内に滞在。			[中]
明治45年	1912	75	9月 宮島にて死去			[中][作]

典拠凡例 [中]…「明治木彫の師匠 中谷省古」[サウンド](サウンド社刊、1932年)
 [作]…「中谷省古作品集」(中谷明子、私家版、1971年)
 [明]…「明治の演芸1～8」(倉田喜弘、国立劇場調査養成部芸能調査室、1980～1987年)
 [見]…ウェブサイト「見世物興行年表」
 [内]…「内国勸業博覧会美術品 出品目録」(東京国立文化財研究所1996年)
 [石]…石川喜直教授資料「明治34年より明治37年8月まで人事に関する上申書類」[自明治2年まで41年退職者履歴書](金沢大学資料館蔵)
 [日]…「近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会」2001年、ゆまに書房
 [東]…「近代日本アート・カタログ・コレクション 東京彫工会」2008年、ゆまに書房
 [平]…「平櫛田中展」特別展図録、ふくやま美術館・小平市平櫛田中彫刻美術館・三重県立美術館、2012年
 [白日]…「大阪日々新聞252号」(大阪城天守閣蔵)
 [郷土]…「郷土名工並助長奨励功勞者小伝」(社団法人大阪府工芸協会、昭和9年)

[註]

- ① 中谷省古については見世物研究の観点からのこれに触れた土居郁雄「余話六題－落語・見世物」『芸能懇話』（1993年、大阪芸能懇話会発行）がその最初期の紹介記事である。
- ② 中谷省古の略歴については拙稿「時代に消費された人形師 中谷省古」（大阪歴史博物館編『近代大阪職人図鑑－ものづくりのものがたり』、青幻舎刊、2016年）を参照。^{アルチザン}
- ③ 「明治木彫の畸人 中谷省古」『サウンド』1巻2号（サウンド社刊、1932年）。
- ④ 略伝では明治3年から1年ほど造幣局に奉職したと伝えるが、現時点では造幣局側の記録にその名を確認できていない。しかしながら、当時は造幣局の草創期で残された資料も少ないため、この点は今後の検討課題である。
- ⑤ 前掲②拙稿「時代に消費された人形師 中谷省古」参照
- ⑥ 「近世名匠列伝 旭玉山」（村松梢風著、改造社刊、1924年）参照
- ⑦ 「故医科大学助教授今田東君小伝」『中外医事新報』第233号 日本医史学会、1889年
- ⑧ 『東京府工芸品共進会報告』東京府編、工芸品共進会、1887年
- ⑨ 主任（審査リーダー）は当時博覧会事業をになっていた官僚の山本五郎であった。
- ⑩ 前掲⑧『東京府工芸品共進会報告』参照
- ⑪ 前掲⑥「近世名匠列伝旭玉山」参照
- ⑫ 国内に、美術品として残される骨格表現は少ないが、東京藝術大学に所蔵される旭玉山作の鹿角製の「人体骨格」は全長33.7cmで、岡山県立美術館に所蔵される正阿弥勝義作の金属製の「骸骨男女」の35cmと近似値である。また、頭頂部に鏝を据え、つり下げて飾る形態も同じである。そのサイズ感や形態の類縁性について、積極的に指摘すべき関連性があるのか否かは不明であるが、ここに指摘しておきたい。
- ⑬ 「医学博士田口和美君」（『日本博士列伝』1892年、博文館）には「紙塑の人耳」とあり、明治6年（1873）の東京日日新聞にも「耳部模造のハルロピー管及びヤコブソン神経」とある（『明治の演芸1』倉田喜弘編、国立劇場調査養成部芸能調査室、1980年）が、松本喜三郎あて文部省出頭命令書（特別展図録『生人形と松本喜三郎』、2004年参照）には「紙塑人形」とある。
- ⑭ 壽々木雪山「近世名匠伝四 彫刻家原舟月」『建築工芸叢誌 第二期 第四冊』（建築工芸協会、1914年）参照
- ⑮ 前掲⑭「医学博士田口和美君」、ならびに田口和美「美術応用人体解剖学」（『東京彫工会報告』第二号、明治24年）参照。なお本題から外れるが、後者の資料からは、田口が外遊した明治20年においてすでにヨーロッパの博物館に自在置物があり、かつ高く評価されていたこともわかる。
- ⑯ 西野嘉章「医学解剖と美術教育 『協分』から『藝用解剖学』へ」参照
- ⑰ 金沢大学資料館所蔵「明治34年4月より明治37年8月まで人事に関する上申書類」および「自明治2年至41年退職者履歴書」参照
- ⑱ 前掲③「明治木彫の畸人 中谷省古」参照
- ⑲ ウェブサイト「見世物興行年表<http://blog.livedoor.jp/misemono/>」参照
- ⑳ 前掲⑲ウェブサイト「見世物興行年表」によると、大阪毎日新聞に「同館に陳列する人体解剖蠟細工は医学校教諭石川喜直の指導を受けて蠟細工発明に有名なる中谷省古氏が苦心惨憺の余になりしものにて、皮膚、筋肉の組織、内臓の構造等少しも実物に違はず、頗る美観なり」との記載があり、医学者石川がいわば人体模型の監修者として位置づけられていることがわかる。
- ㉑ 前掲⑲ウェブサイト「見世物興行年表」参照
- ㉒ 大阪市内大宝寺町にあった珊瑚卸商の小栗勘兵衛のことか。
- ㉓ 前掲③「明治木彫の畸人 中谷省古」参照
- ㉔ 前掲⑲ウェブサイト「見世物興行年表」参照

- ②⑤ 『近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会』（ゆまに書房、2001年）参照
- ②⑥ 前掲②⑤『近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会』参照
- ②⑦ 『明治の演芸』（倉田喜弘、国立劇場調査養成武芸能調査室、1980～1987）参照
- ②⑧ 前掲①⑨ウェブサイト「見世物興行年表」参照
- ②⑨ 『近代日本アート・カタログ・コレクション 東京彫工会』（ゆまに書房、2008年）参照
- ③⑩ 前掲②⑤『近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会』参照
- ③⑪ 前掲②⑤『近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会』参照
- ③⑫ 前掲③「明治木彫の畸人 中谷省古」参照
- ③⑬ 前掲②⑦『明治の演芸』参照
- ③⑭ 前掲②⑨『近代日本アート・カタログ・コレクション 東京彫工会』参照
- ③⑮ 前掲②⑨『近代日本アート・カタログ・コレクション 東京彫工会』参照
- ③⑯ 前掲②⑤『近代日本アート・カタログ・コレクション 日本美術協会』参照
- ③⑰ 『上方10号』（昭和6年）参照
- ③⑱ 前掲③⑰『上方10号』参照

Shoko Nakatani - A Prodigy of Modern Period in Osaka who Crossed the Fields of Exotic Show, Medicine and Art

NAITO Naoko

Shoko Nakatani was a puppet master in Osaka, but the personality and active details weren't learned about. This manuscript, an investigation outcome by special exhibition preparatory process, and, I'm quoting material from various points such as a living doll performance, medicine and fine arts and am approaching his wide active reality. It's compared with contemporary fine arts and a social current and it's considered about medicine concerning Shoko Nakatani, fine arts and a point of tact with a living doll performance in particular. I show that it was being pursued to express the inside realistically more than Shoko's person expression's imitating the appearance from a wooden statue of Mrs. Okuda where existence is the only work which can be checked and the material kinds for which it was left.